留萌
寂しさと懐かしさ、温かさ

巖谷　國士 Iwaya　Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全５巻。3月7日には札幌の北海道立文学館で講演「砂澤ビッキと澁澤龍彦」をする。

深川からの留萌本線が朝の雨で不通になっていたため、留萌まではバスで行った。ホテルでしばらく休んで、もうすっかり晴れたことをたしかめてから、フロントで地図をもらい、まず近所をぶらつくことにした。

その地図では「中心部」としてクローズアップされているあたりにいるのに、あまりその感じがしない。空き地が多く、人通りが少なく、ときどき食堂や商店もあるにはあるが、客のいる気配はない。月並だが、北海道でも人口減少の際立つ町に特有の、廃れた詩情といったものを感じる。ゆるやかな坂をくだって国道231号線に出ると、だが車はかなり走っていて、古い町らしい石造の銀行や、定番の「～プラザ」「～マート」などもあった。

どこか普通でないという気がしたのは、人々が何かの準備をしているらしく見えたことだ。子どもたちの姿も目立つ。横道のあちこちにトラックが停っていて、大人も子どもも佇んだり、しゃがんで話しこんだりしている。

これから何かの催しでもあるのではないか、と思いつき、そばに立っている元気な中年の女性に尋ねてみると、

「どんと祭だよ。夕方からあんどんが出て、きれいだよ。見て行くといいよ。」

「夏祭ですか？昔からあるの？」

「戦後の漁師の祭みたいなもので、威勢がいいよ。以前は８月１日の夏祭だったけど、いまは７月末の金・土にやっている。きょう来られたのは運がいいですよ。」

まったく知らなかったので、たしかに幸運かもしれない。今日は有名な黄金岬の夕陽を見に行く予定だったが、やめようかと思った。旅先で未知の祭に出くわす偶然など、そうあるものではない。たまたま町の「中心部」へやってきたからこそ、その準備のありさまを見ることができたのだ。

そのうちに横道のひとつで太鼓の音が鳴りわたり、甲高い掛け声が近づいてきた。見れば子どもたちの

留萌の「どんと祭」のはじまる日の夕刻、街頭でくりひろげられた子どもたちのパフォーマンス。右手前が踊りの手本を示すリーダーのお姉さん。　撮影：筆者

「どんと祭」で練り踊る人たち。整然としていない、思い思いのステップがおもしろい。　撮影：筆者

行列で、うしろには鐘楼のような屋根のついた山車（？）が従い、ゆっくりと進んでくる。山車の前面の看板に「広報あんどん」「留萌商工会議所」とあり、音響はその奥から聞こえている。

まもなく行進がとまると、子どもたちの列は道路の幅いっぱいにひろがり、てんでんばらばらに踊りだした。先頭ではかっこいいお姉さんがひとり、踊りの手本を示す。子どもたちはその真似をはじめたが、なかには勝手なフリをつづけるのもいる。

リーダーのお姉さんも子どもたちも、「88 GEED」と大書されたTシャツを着て、一応「チーム」の体裁になっているようだが、てんでんばらばらの感は否めず、それでも間をおいてガッと両足で地を踏むという、独特のリズムの表現だけはそろっている。男の子も女の子もいるが、どちらかというと女の子のほうが楽しそうだ。

そして何よりも迫力があるのは、先頭にいるお姉さんのパフォーマンスだった。子どもたちをリードしているというより、ひとりで自分に集中し、ダイナミックに身をくねらせながら、力強くガッとステップを踏む。顔の表情もまじめで一本気で、なかなか目を離せない。惹きつけられる。

これは夜の祭を予告する「広報」活動か、それとも日没前にある子どもの催しなのか、どちらでもいい。とにかくこれだけではすまないので、夜の「あんどん」を見るべきだろう。黄金岬の夕陽の撮影はあきらめて、ひとまず夕食をとっておくことにした。

「どんと祭」のはじまる夜

7月末とはいえ寒く感じられたので、ホテルでコートを羽織ってから外へ出た。あいかわらず人通りの少ない道々をさまよい、手ごろな食堂を見つけて入る。「カスベの煮つけ」はさすがに旨かった。暖まってまた暗い道に出て、角をまがるとふいに前方が明るくなり、逆光のなかに連れだって歩く人影が見えたので、それを追ってゆくと広い通りに着いた。地図によれば「開運だるま通り」である。

ところどころ照明された舗道に、かなりの人数が集まっている。浴衣すがたのおばさん、ほろ酔いかげんのおじさん、風船をもった子どももまじり、いかにも祭の夜だ。観光客はあまり見あたらず、住民たちがリラックスして、既知の何かを待っている。

まもなく南側から太鼓と掛け声が聞こえ、「あんどん」らしいものが見えてきた。内部からまばゆく色あざやかに照明され、夜空に浮びあがる仕掛が美しい。弘前の「ねぷた」にそっくりで、武者像などを描いたものもあれば、今風のキャラクターをアレンジしたものもある。

「商工会議所」だけでなく「JQ」「ライオンズクラブ」など、市内にグループがいくつかあって、それぞれ趣向をこらした「あんどん」を押してくるのだが、その前を踊り練りすすむ人々のありさまこそ見ものだった。

半纏すがたの男女はグループごとに違う囃子と振付で踊っているが、阿波おどりやカルナヴァルと同様、整然と同じことをするのが主眼ではなく、先ほどの子どもたちのように、ひとりひとり好きなように踊っている感がある。画一性よりも多様性。それでも激しいリズムと、めりはりをつける掛け声にあわせ、地面をガッと踏みつける瞬間は共通していた。

「ライヤ！」

と聞こえるその掛け声は、もしかすると「雷夜！」かもしれない。街頭デモのシュプレヒコールにでも応用

黄金岬の下の岩礁で、波のリズムに乗って踊りだしたかに見える女性。留萌の市民だろうか。　撮影：筆者

「なんもないよ。寂しい町だよ。以前にはニシン漁なんかで賑やかだったけど、いまは人口も減ったし、産業がふるわないからねー。」

「人が外へ出て行くのかな？昨日はお祭を見たけれど、たしかに若者が少なかったな。」

「あたしは生まれてからずうっと留萌だから、景気のよかった昔がなつかしいよ。でも、よそへは行かない。留萌はいいところだよ。ふるさとだよ。出て行った人でも、帰ってくる。帰ってこられない人でも、帰りたいんだよ。」

「ほんとにいいところだ。帰ってこられないなんて、悲しいね。」

「悲しいよ。それでいいんだよ。そこがいいところなんだよ。」

黄金岬の展望所に着いた。岬の高所にあるわけではなく、黒いごつごつした岩場の上にある小公園のような空間で、外海まで眺望できる。囲いのなかに記念碑が立ち、地面には魚介や海鳥を描くモザイクが点在している。イカ、タコ、カレイ、ホタテ、カモメ、タツノオトシゴなどもあっておもしろいけれど、ニシンはないようだった。向うのベンチにすわって、観光客なのか５、６人の若者が、曇天の朝の海を飽きずに眺めている。

西にひらけた広大な海景からして、夕陽の名所であることは当然で、地名の由来は夕陽の黄金色だろうと思っていたが、そうではないらしい。かつてニシンを満載した船がここを往来し、そのありさまが黄金をちりばめた「一越し千両の浜」に見えたことから、黄金岬と呼ばれたのだという。

留萌の歴史は古いほうだ。語源はアイヌ語の「ルルモッペ」で、「潮汐が奥ふかく入る川」、つまり留萌川のことである。1596年に松前藩が「ルルモッペ場所」をひらいたが、1869（明治２）年には留萌（る

できそうな、激励とも抗議とも歓喜ともとれる独特の表現だった。

踊り自体も整ってはおらず、ときにはてんでんばらばらに盛りあがるのだが、一種の陶酔のともなう個別のパフォーマンスもある。沿道の市民が思わず加わってくるような局面はなかったが、私の体はこっそり「雷夜！」に反応していた。

それにしても寒い。浴衣のおばさんやTシャツの子どもは三々五々帰りはじめたので、名ごり惜しいが私も祭を離れ、暗い裏道を通ってホテルにもどった。明日は早起きして、黄金岬の夕陽ならぬ朝陽を見に行かなくてはならない。

黄金岬の岩の上で

翌朝６時ごろに起きたがすでに明るく、北海道の日の出が早いのを忘れていた。おまけに朝食の予約も忘れていたので、タクシーを呼び、黄金岬から喫茶店にでもまわってもらうことにした。

運転手さんは初老の女性で、どこか物憂い感じのある人物だった。といって無口ではなく、けだるい語調でよくしゃべる。早朝から町めぐりをする旅行者がめずらしいようだ。

「どちらから？留萌ははじめて？」

「東京です。はじめてだから黄金岬には行ってみたくてね。ほかにも見るところがあったら教えてください。」

もえ）と表記され、２年後に漁業経営がはじまった。1902年には村に、６年後には町になり、1910年に築港工事を開始、留萌－深川間の鉄道が開通すると、西の増毛（ましけ）にかわって栄えはじめ、1914年には増毛支庁が留萌に移されて、留萌支庁と改称されている。

大正期以来、周辺各地に炭鉱が発見され、羽幌（はぼろ）線、天塩炭砿鉄道、留萌鉄道、達布（たっぷ）森林鉄道などの路線ができて（どれもいまはない）貨物輸送の拠点になり、国際貿易港としても発展をつづけた。戦後にはサハリン（樺太）からの引揚者を受けいれて市制になり、石炭や木材の輸送のほか、ニシン漁業、カズノコやタラコの加工業なども栄え、1960年ごろには人口４万を擁していた。だが、やがて炭鉱の閉山や、輸入材の急増による林業の後退、ニシン漁の不振などがつづき、留萌を起点とする鉄道はつぎつぎに廃線となった。現在の人口は２万である。

タクシー運転手の女性が見てきたのは、そんな留萌の町の盛衰だったのだろう。ニシン船や各種輸送船のもはや通わない海を眺めて、そのことに思いをめぐらしていたが、この岬の風景はそれにかかわりなく美しく荒々しい。黒い岩礁に容赦なく寄せる波には独特のリズムがあって見飽きない。私もまたベンチで茫然としていた。

遠くの岩礁の上に、ひとりの若い女性が立っている。彼女はしばらく海を見ていたかと思うと、やおら体勢を整え、荒波のリズムに乗ったかのように、なんとステップを踏みはじめたのである。

「どんと祭」のフリだとしか思えない。彼女は踊りながら、「雷夜！」と叫んでいたのではなかろうか。

港から駅前の喫茶室へ

岬から港にも行ってもらった。広々とした埠頭（ふとう）である。人も車もほとんどいない。船そのものも少ない。それでも向う岸には大きな工場のような建物が見えるので、運転手さんに尋ねると、

「太平洋セメントのタンクだよ。」

「産業がないといったけど、すごいタンクじゃないですか。」

「いや、運ぶ途中で貯蔵しているだけだから。産業じゃないよ。」

埠頭のあちこちに水たまりがあり、今朝の雨の名ごりかと思ったら違った。草が生えたり苔むしたりしている。その先に車が１台とまり、３人の家族が降りてきた。お父さんは釣りをはじめる。お母さんは娘をつれてぶらぶら歩く。ときどきお父さんのところへ行って話しかけるが、釣れないらしくてお父さんは動かない。母と娘はなにもすることがないようで、手をつないだり離れたりしながら歩く。そのうちに、なにもしないことに楽しみを見いだしたようである。

タクシーはさらに駅前へ走った。駐車場になった広場の向いに、小さな青い二階家があり、美容院なのだが、２階は喫茶室だという。そこで運転手さんと別れた。知性と憂愁のただよう個性的な女性だった。

喫茶室は1960年代そのままで、赤いビニール張りのソファ、古ぼけたシャンデリア風ランプ、床に新旧４つのストーブ、壁にはジェームズ・ディーンの写真などがある。新聞を読んでいるおばさんに頼むと、店の雰囲気にふさわしいセットが運ばれてきた。

食パン４枚切りくらいの厚いトーストを斜めに切ってバターを塗ったもの。厚ぼったい焦茶色のカップにコーヒー。銀製を模してホタテの貝殻みたいな蓋をつけた砂糖入れ。それだけ。380円。

ガラス窓から駅舎が見える。幅が広く、本線の始発・終着駅の規模がある。かつては札幌や旭川へ直行する急行もあったのだ。戦前には多くの支線の乗換駅で、貨物列車も頻繁に出入りしていたのだ。

駅舎内には廃線になった本線の一部の、有名な留萌－増毛間の列車の写真展示もあるのだが、それを見るのは増毛の町を歩いてからにしようと思った。

留萌駅前の喫茶室。壁にジェームズ・ディーンの写真入り古いカレンダー。テレビでは前日の相撲ダイジェスト。女主人は下のソファで新聞を読んでいる。　撮影：筆者